



ヘルマン・ヘッセにおける〈東方〉

大杉, 奈穂

(Degree)

博士 (文学)

(Date of Degree)

2023-03-25

(Date of Publication)

2027-03-25

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲第8520号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100482268>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



論 文 内 容 の 要 旨

論 文 題 目 ヘルマン・ヘッセにおける〈東方〉

氏 名 : 大杉 奈穂

神戸大学大学院人文学研究科博士課程後期課程文化構造専攻

指導教員氏名 (主) 増本 浩子 教授
 (副) 久山 雄甫 准教授
 (副) 緒形 康 教授

ヘルマン・ヘッセは東洋と深く結びついた作家である。それゆえ、東洋をテーマとする先行研究は数多く存在するが、ヘッセがなぜ生涯を通じて東洋と関わったのかは明確にされていない。また、適切でない東洋との関連付けや、未だ言及されていない箇所もある。加えて、ヘッセにとっての東洋とはインド、中国、東南アジア、西アジアであるという前提が見られるが、作品を読む限り、彼の思い描く東洋はそもそも現実の東洋と必ずしも一致していない。したがって本論は、ヘッセの言う東洋はどういったものなのかを『クリングゾルの最後の夏』を手がかりに明らかにし、次に、『シッダールタ』、『荒野の狼』、『ガラス玉遊戯』を分析し、ヘッセが東洋をどのように受容したかを見ていく。これらの作業を通して、なぜ彼が終生東洋と関わり続けたのかを検討する。また本論は、その過程においてこれまで見落とされることの多かった彼の社会的側面も提示する。

第1章では『クリングゾルの最後の夏』からヘッセの言う東洋について考察する。準備作業として、ヘッセがイタリアや東南アジアをどのように受容したかを見ていく。『ペーター・カーメンツィント』では、「南・健康／北・病弱」という図式が見られ、ヘッセにとって南は救済の地として機能していたことがうかがえる。その後、ヘッセの関心は南から東へと転じるが、現実の東南アジアを体験することで東は救済の地と失望の地という相反する意味を持つようになる。もはや東を全面的に賛美することはできず、そのためにヨーロッパに属するが言語や気候が違うイタリア語圏スイスという南がより現実的な理想郷として機能するようになる。イタリア語圏スイスに転居後執筆された『クリングゾルの最後の夏』はその地が舞台であるが、東洋的な要素が見られる。それにより南と東が合一し、ヘッセ独自の東洋である〈東方〉が形成される。そのことは彼が実際の地理関係に重きを置いていないことを示唆する。主人公に注目すると、彼が没落について語る場面がある。それはヘッセが東南アジア旅行後に内面を探索した結果、自身の没落をも認めなければならないという見解に至ったことの表れである。ヘッセの言う没落は再生と表裏一体の関係にあり、また本作品では、人間が自然と分化されていない世界へと還っていくさまによってイメージされる。そのような世界は、本作品の言葉を借りて「原始世界（Urwelt）」と名付けることができるが、東南アジアで見た原始林（Urwald）が「原始世界」のイメージ形成に寄与していると考えられる。このように、東南アジアは意義を失ったわけではなく、抽象化され、最終的に存在物の揺籃の地を意味するようになる。「原始世界」は本作品の舞台とクリングゾルの自画像上に現れ、ヨーロッパと一個人の没落が暗示されるが、同時に、来るべき再生も暗示されることになる。このようにして、ヘッセは戦後に生きる人々に自身が置かれている状況を容認させ、また、その状況に積極的意義を見出させようとしたと言える。

第2章では『シッダールタ』における老子の思想を分析する。また、キリスト教とインド思想と関連

する箇所にも考察を加える。東南アジア旅行から年月を経ることで、ヘッセはその地での体験を失望や西洋中心主義的思考を抜きに語ることができるようになる。また、旅行によって彼はインドから離反し、中国がインドに替わる存在となり、特に老子は彼に多大な影響を及ぼすようになる。『シッダールタ』の舞台をインドに、思想面を老子に関連付けることで、ヘッセはインドと中国との取り組みを総括したと言える。このことを確認した後で、本作品における幼児のモチーフ、ヴァースデーヴァ、シッダールタ、川を老子の思想から読み解く。作中、仏陀は幼児のようだと記述されるが、老子によれば徳を備えている人は幼児に喩えられる。先行研究において、本作品はヘッセの仏教との決別を表明していると主張される。しかし、仏陀の描写から仏陀という人物は否定されていないと言える。シッダールタは、老子や聖人の姿が反映されたヴァースデーヴァと、老子の言う絶対的存在であるタオが反映された川から学び、結末部の場面にあるように、川すなわち絶対的存在と合一し最高の境地に達する。このように、本作品には老子の思想が色濃く反映されているが、ヘッセは読者に老子の思想へ傾倒することを促しているわけではない。主人公が老子の思想に則って内的成長を遂げるのは、ヘッセがその思想から得た成長を表すものであり、ヘッセ自身の歩みを表しているにすぎない。川や、作中頻繁に語られる愛は、老子の思想だけでなくキリスト教やインド思想とも関連している。ヘッセは老子の思想に取り組むことで、真理は国や時代の違いを越えて普遍であることを認識した。作中の愛や川によって、彼はそのことを提示しようとしたと言える。読者はシッダールタの歩みを通して絶対的存在を自己の内に見出す過程を追体験するが、その体験は作品が出版された当時のドイツ人だけでなく、国や時代の違いを越えて万人にとっても可能である。

第3章では『荒野の狼』におけるインド思想および「合一」に注目する。主人公ハラーは、仮面舞踏会において現実世界と自己との間に存在した垣根を取り払い、長年失っていた他者との結びつきを回復する。本作品執筆時の時代背景を考慮すると、この場面には群集心理の肯定ともとらえられかねない危うさがある。しかし仔細に見ると、この場面はヴェーダーンタ哲学の「汝はそれなり」という教えを反映しており、群集心理の肯定とは無関係であることがうかがえる。「論文」やヘルミーネの発言からも「汝はそれなり」という教えが読み取れるが、両者では表現できない、「汝はそれなり」があらゆる他者に対して言うことを仮面舞踏会の場面は表している。また、この場面は、ヘッセがインド思想や老子の思想から生み出した「合一」という思想とも関連していると考えられる。「合一」には、絶対的存在、また、絶対的存在の中で存在物が調和している状態という2つの意味がある。本作品執筆時、後者の意味が強調されるようになった一因は、作者自身の社会に対する嫌悪感および社会からの疎外感にあると考えられる。ヘッセはハラーに不特定多数の他者との一体化を体験させることで、自身の他者と

の関係性の問題に決着をつけようとした。しかし、本作品は仮面舞踏会の場面で大団円を迎えるのではない。他者との一体化を体験した後、ハラーは魔術劇場で自身の内面と対峙する。このような物語の流れから、ヘッセは全体の調和を重視する東洋的な考えを精神的支柱にすると同時に、個を尊重しようとする態度も有していたことが明らかとなる。そのことは、ヘッセが東洋に盲従しているわけではないことを示している。彼は東洋思想から他者との本質的な繋がりを認識することによって、逆説的にも自身を取り巻く現実の群集にとらわれず自己を確立させる。

第4章では、『ガラス玉遊戯』における「螺旋」を考察する。本作品には東洋に由来する生まれ変わりのモチーフが見られる。また、作中インドの世界観が語られるが、生まれ変わりもインドの世界観も「循環」によって特徴づけられる。本作品でヘッセはこの東洋的な「循環」を西洋の進歩史観的「直線」と合一させ、「螺旋」という新たな発展モデルを作り出す。彼は東洋、西洋のどちらか一方に偏重せず、それらを合一させることで、繰り返された戦争の最中、未来に希望を抱き現状に耐えようとしていたと考えられる。「螺旋」は音楽名人、クネヒト、ティートの三者間の精神の継承においても表現されている。この三者間において、「音楽の精神」が継承されるが、それにはヘッセが両親に見た奉仕の精神が反映されている。精神を他者に移植することによって、精神はそのままコピーされるのではなくそれ以上のものに変化することが作中語られる。音楽名人がカスターリエンでクネヒトを教育した一方、クネヒトはより多くの他者へ音楽の精神を広めるために世間へと赴いたという設定は、音楽名人から受け継いだ精神が一段と高められたことを示している。ところで、精神世界に住まう主人公が世間へ接近するという設定は、『シッダールタ』以降描かれてこなかった。晩年、ヘッセは共同体をテーマとした『東方巡礼』および『ガラス玉遊戯』を執筆したが、両作品において共同体と世間との関わりに差異が見られる。前者では、共同体と世間は接点を持たないが、後者では、共同体の世間への接近が感じ取れる。このように世間の扱われ方が違うのは、衰退しつつある西洋の文化を保護するためには、『東方巡礼』に登場する結社や『ガラス玉遊戯』のカスターリエンといった共同体だけでは不可能であり、共同体と世間の交流が不可欠であるとヘッセが認識するに至ったからだと言える。『シッダールタ』執筆期以来ヘッセは再び世間へと接近したが、そのことは、いかに西洋の文化的衰退に対して危機感が強かったかを表している。本作品でヘッセは螺旋という表象によって、キリスト教的奉仕の精神や西洋の文化の存続および発展を暗示し、未曾有の大惨事を迎える西洋の救出を模索したと言える。

これらの考察から、本論は以下の結論に達する。ヘッセは東洋と深く関わったが、それに没入したのではなかった。彼は西洋人としての立場を捨てることなく東洋に取り組み、自身や困窮した時代に生きるドイツの人々やヨーロッパにとって、東洋がどのような意味を持ち得るかを終生探求し続けた。その

際、現実の地理的東洋は抽象化されていき、イタリアという南の地域とさえ結びつき〈東方〉という表象となる。ヘッセ自身、「光は東方より (Ex Oriente Lux)」という言葉に言及したことがあるが、〈東方〉は、西洋にとっての光、すなわち、彼にとって衰退するように思われる西洋を救出するための手段であった。

論文審査の結果の要旨

氏 名	大杉 奈穂
論 文 題 目	ヘルマン・ヘッセにおける〈東方〉
要 旨	
ヘルマン・ヘッセは東洋と関係の深い作家である。それにはまず、両親ともにインドで宣教活動を行った経験があるなど（母親はインド生まれ）の家庭環境や、アジアへの関心を高めていた時代風潮といった個人的・時代的な背景がある。しかし、それだけでは長年に渡るヘッセの関心の高さを十分には説明できない。にもかかわらず、先行研究はヘッセが生涯を通じて東洋と取り組んだ理由を明確にしてこなかった。また、先行研究ではヘッセにとっての東洋とはインド、中国、東南アジア、西アジアであるということが自明の前提となっているが、彼の思い描く東洋はそもそも現実の東洋と必ずしも一致していない。こうした問題意識をもとに、本論文はヘッセの作品のうち『クリングゾルの最後の夏』、『シッダールタ』、『荒野の狼』、『ガラス玉遊戯』を中心に分析を行い、書簡なども参照しながら、ヘッセ作品に表象されている東洋、すなわち〈東方〉とは何かを明らかにした上で、彼が〈東方〉をどのように受容し、なぜ終生〈東方〉にこだわり続けたのかについて考察している。 本論文は「序論」で先行研究を検討し、ヘッセの上記 4 本の小説をそれぞれ扱った 4 つの章と、論文全体をまとめて今後の展望を示した「結論」によって構成されている。 第 1 章では『クリングゾルの最後の夏』を手がかりに、ヘッセ独自の〈東方〉がどのように形成されたかが明らかにされている。ヘッセにとってはもともと南が救済の地を意味していた。その後、関心は東に移るが、実際に旅行して現実の東南アジアを体験することで、東は救済の地であり続けながらも失望の地となる。東南アジア旅行後、ヘッセはもはや東を手放して賛美することができず、イタリア語圏スイスという南をより現実的な理想郷とみなすようになり、実際にそこで暮らすようにもなった。『クリングゾルの最後の夏』はイタリア語圏スイスを舞台にした小説だが、本論文は、その土地に東洋的な要素が導入されることによって南と東が統合していると主張する。つまり、イタリア語圏スイスの森に東南アジアの森が重ね合わされ、南と東は合一して地理的な意味での東洋とは異なる〈東方〉が形成されているというのである。現実の地理的東洋が抽象化され、イタリア語圏スイスという南の地域と結びついて〈東方〉という表象となっているという指摘は執筆者独自のもので、非常に重要なものである。 第 2 章では、インドを舞台にした小説『シッダールタ』に、仏教思想のみならず老子の思想が色濃く反映していることが示される。ヘッセは東南アジア旅行で失望を味わったことによってインドから離れ、代わりに中国に注目するようになった。特に大きな関心をもったのは老子の思想で、リヒャルト・ヴィルヘルムによる『老子道徳経』の独訳を精読した。その影響は『シッダールタ』の全般的な言語表現のみならず、たとえば渡し守ヴァースデーヴァが老子を彷彿とさせる人物として登場する点にも見られることが、詳細な分析によって明らかにされている。さらに彼の居場所である川には、老子の言う絶対的存在であるタオが反映されている、と執筆者は主張し、シッダールタはそのようなものとしてのヴァースデーヴァと川から学び、絶対的存在と合一して最高の境地に達したと解釈する。また、川や愛のモチーフは老子の思想だけでなくキリスト教やインド思想とも関連している点が指摘され、ヘッセは老子の思想との取り組みを通じて、真理は国や時代の違いを越えて普遍であることを認識したと結論づけられる。仏教思想や老子の思想についての理解にまだ不十分な点があるものの、作中、仏陀は幼児のようだと記述されている部分に老子の影響を見ていることはすぐれた指摘であり、特筆に値する。	

主査記載
氏名（自署）

増本浩子

第3章は『荒野の狼』におけるインド思想および「合・(Einheit)」の概念に注目している。この小説の主人公は、仮面舞踏会において現実世界と自己の内面世界との間に存在した垣根を取り払い、長年失っていた他者との結びつきを回復する。この場面には一見、ナチズムの時代の群衆心理を肯定したものともとらえられかねない危うさがあるが、実はヴェーダーンタ哲学の「汝はそれなり」という教えを反映しており、群衆心理の肯定とは無関係であるという執筆者の主張が、本論文では十分な説得力をもって根拠づけられている。また、執筆者によればこの場面は、ヘッセがインド思想と老子の思想から生み出した「合一」の概念とも関連している。この「合一」には、絶対的存在そのもの、および絶対的存在の中で存在物が調和している状態という2つの意味がある。仮面舞踏会で他者との一体化を体験した後、主人公は魔術劇場で自身の内面と対峙する。このような物語の流れは、ヘッセが全体の調和を重視する東洋的な考えを精神的支柱にすると同時に、個を尊重しようとするヨーロッパ的な態度も有していたことを示すものであるという解釈は、第4章の東洋と西洋の「合一」というテーマにつながっていく。

第4章は『ガラス玉遊戯』に見られる「螺旋」のモデルについて考察している。この小説は東洋的な転生の思想が物語の構造の中核にあり、主人公には前世でどのように生きたかを想像して履歴書を書く課題が課せられる。また、世界をヴィシュヌによる生成とシヴァによる消滅の循環として見るインドの世界観も登場人物の口から語られる。本作品でヘッセがこのような東洋的「循環」を西洋の進歩史的「直線」と合一させ、「螺旋」という新たな発展モデルを作り出した、というのが本章のテーゼである。執筆者によれば、「螺旋」は複数の登場人物のあいだで行われる精神の継承においても表現されている。精神を他者に伝える際、精神はそのままコピーされるのではなくそれ以上のものに変化することが作中語られるからである。「螺旋」は、ヘッセが東洋と西洋のどちらか一方を偏重せず、それらを合一させたことの表れである、と執筆者は主張する。そして、西洋の文化的衰退に対して強い危機感を抱いていたヘッセが、螺旋という表象によって、キリスト教的奉仕の精神や西洋の文化の存続および発展を暗示し、未曾有の大惨事を迎える西洋の救出を模索したと結論づけられている。

ヘッセのテキストを丁寧に読み込んだ、手堅い論文に仕上がっている。仏教思想や老子の思想をはじめとする東洋古典思想についての理解に必ずしも十分ではない点があり、『老子道德経』とヘッセの書いたテキストを比較するときの方法論についても検討の余地が残されているものの、本論文における議論の有効性を損なうものではなく、今後の課題としてとらえるべきだろう。ヘッセの言う東洋が必ずしも地理的な概念ではないという指摘や、作品にみられる「螺旋」のモデルから東西の思想の合一を目指したヘッセの姿勢を読み取っている点は新しい見地であり、高く評価できる。また、ヘッセの東洋への関心が単に個人的な動機によるものではなく、二度の大戦を経験する西洋社会を救出しようとするものであったことを示すことにより、内向的で社会情勢にコミットしない作家というヘッセの一般的なイメージを払拭することにも成功している。

以上の審査結果により、審査委員会は論文提出者大杉奈穂が博士(文学)の学位を授与されるに値するとの結論に達した。

審査委員

区 分	職 名	氏 名(自 署)	区 分	職 名	氏 名(自 署)
主 査	教授	増本 浩子	副 査	講師	早川 大基
副 査	教授	中畑 寛之	副 査	京都大学 教授	松村 朋彦
副 査	准教授	久山 大佳市			